

## ほうそうの神木（春日町）

「どうだな、おさよ、少しは気分が良くなったかな。」黒井芝村の百姓吉蔵は、野良（のら）仕事から帰るとすぐ妻に声をかけました。今まで病気などしたことのないおさよが、昨日から寝こんでいました。

「はい、すみません。きょうはまた熱が出たようで、体中がいたんでなりません。」

「そりゃ、いかな。どうれ。」おさよの額（ひたい）に手をあてた吉蔵はびっくりしました。やけるように熱いのです。おどろいた吉蔵はすぐ町医者のところへ行行って、ようすを話し、せんじ薬をもらってきました。おさよの高熱は三日つづき、それから熱は少しさがりましたが、意識がぼんやりしていました。

「どうじゃな、少しは熱がさがったかな。」町医者が往診（おうしん）にきてくれました。医者は、おさよをていねいに診察（しんさつ）しました。腹や、わきに出ている細かい発疹（はっしん）をみつけてびっくりしました。

部屋を出た医者は、「吉さん、吉さん。」と手まねきをして呼ぶと、小さい声でいいました。

「吉さん、びっくりするんじゃないぞ。おさよさんは、どうやら、ほうそうらしいぞ。」

「え！ほうそう、どうしたら、よろしいのでしょうか。」

「ほうそうはな、お前さんも知っているように、百人かかったら、五十人は命があぶないという難病（なんびょう）じゃ。くすりはわたしがこしらえてあげる。病人は静かに寝かせて、食べ物、かゆと野菜、それから、食べられたら味の浅い魚を食べさせなさい。まあ、だいじにすることじゃ。」

医者は、そういつて帰っていきました。

それから数日後、おさよの熱はようやくさがり、体の痛みもおさまり体中がかゆくなり、カサブタがとれはじめました。しかし、一心に世話をした吉蔵は、とうとうほうそうに感染してしまいました。これがきっかけになって、黒井近郷はもちろん、丹波一円にほうそうが大流行しました。

その頃、ふしぎなことに、黒井、兵主神社の奥の院にある「くすの木」の古木の葉に、ほうそうのようなカサブタに似た粟立ちが、二つずつ並んで出ているのがわかりました。

人びとは、この「くすの木」を「ほうそうの神木」だといって、祈りをこめるようになりました。

その葉を持ちかえって、病人をさすると、ふしぎに快方にむかいました。そのため遠くからもこの木を、おがみに来る人が列をなしたといいます。

この「くすの木」の葉の粟成ちは、ほうそうの流行が下火になった頃からしだいに消えて、もとの葉にもどっていきました。

それを見た人びとは、やはり「ほうそうの神木」だったといって、ますます信仰するようになりました。この古木は、今も、兵主神社の奥の院のあるといわれています。

